

Glocal Tenri



2

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.21 No.2 February 2020

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
話一条
／堀内みどり..... 1
- ・ 日系移民の歴史にみる天理教の北米伝道の様相 (36)
現代の北米日系人と天理教①
／尾上貞行..... 2
- ・ 日本語教育と海外伝道 (19)
日本語教育でのコンピューター利用について②
／大内泰夫..... 3
- ・ キルケゴールで読み解く 21 世紀 (17)
最も不幸な者は最も幸福な者—自由なるがゆえのパラドックス—
／金子 昭..... 4
- ・ 伝道と翻訳—受容と変容の“はざま”で— (21)
仏典翻訳の歴史とその変遷④
／成田道広..... 5
- ・ コロンビアへの扉—ラテンアメリカの価値観と教えの伝播— (8)
3. コロンビアにおける日本人移民の話—その3
／清水直太郎..... 6
- ・ 遺跡からのメッセージ (54)
弥生時代を再考する⑧ 時代の荒波を受けた綾羅木郷遺跡
／桑原久男..... 7
- ・ コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関係試論 (31)
マリアン・ングアビ大統領
／森 洋明..... 8
- ・ 天理参考館から (19)
こけしと天理
／幡鎌真理..... 9
- ・ ヴァチカン便り (42)
念願の日本訪問
／山口英雄.....10
- ・ おやさと研究所ニュース.....11

第 327 回研究報告会 (遠藤正彦) / 第 328 回研究報告会 (芹澤知広) / 宗教研究会を開催 (海野典子) / 『グローカル天理』年間購読のご案内 / 天理ギャラリー第 169 回展の案内 / 2019 (令和元) 年度「教学と現代」の案内 / 2020 年度公開教学講座の案内 /

巻頭言

話一条

おやさと研究所主任 堀内みどり Midori Horiuchi

巻頭言をしばらく担当することになった話です。人間があれこれと“神様について”する話というわけではないのですが、新年度からは、従来のように所長担当の運びとなりました。残り2回となり、個人的に気になっていた「話一条」と「聞きだすけ」ということに触れてみたいと思います。

「こふき本(「こふき話」に関連した教理の記録)」は、

神のゆうことわしんしつとをもてねかゑば、おかみきとふや、くすりのまいでも、はなしいちしよふでみなたすかること、これしよふこなり。(16年榊井本、『こふきの研究』139～140頁)と記しています。「はなしいちしよふ(話一条)」で「みなたすかる」ので、それが神の話が真実である「しよふこ(証拠)」だということです。ではこの神の話、話一条の話の内実、また「話一条でたすかる」とはどういうことなのでしょう。「おさしづ」を頼りに少し思いを巡らしてみます。

明治21年11月2日(陰暦9月29日)の「本席身上障りに付願」では、「身の障り尋ねるまでやない、いつまでも身の障りぐらい尋ねるではない。……身の障りと話一条思やんして見よ。……これからはこの話通りにするは神の道や。」と言われ、明治22年11月20日の「おさしづ」では「話一条の理、身が速やかになる。」(諸井その三十三才身上障りに付伺)と説かれます。

そして、「この話一条に凭れ、外なる事は要らん。」(22.5.12)、「話一条、話人間拵えた時の話、」(22.9.19)、「紋型も無い処からしんばしらすと、話一条で固め来たる。」(24.11.1)、「人体借りて来る事情これ難しい。よう聞き分け。これまで話一条述べたる事情、理と言う、」(26.10.16)と教えられます。これらのことから「話」は、親神がなされた話、つまり教祖が話

された話です。人間があれこれと“神様について”する話というわけではないのです。人間創造(人間拵えた時の話)、(人体)借りものことなど、この「話」通りに進むことが「神の道」を歩むことができると言われる「話」なのです。

さらに「おふできき」で、これからハナにはなしをするならばかんろふだいはなし一ぢよ(9:44)と歌われていることを考え合わせると、親神や教祖がされた「話」は「たすけ(救済)」の元であることが明瞭になってきます。人間がその「話」を信じて「凭れる」ことができる「話」であるから、「たすかる」ということなのです。

こうして親神からの「話」は、「お論し」や「おさしづ」の教理の土台であり、この「話」が基となって、教理が展開していくと理解できます。

一方で、「悟りが分からんから尋ねにやならん。たすけ一条の理は渡してある。話一条は論しある。何度聞いても分からん者理はどんならん。……かりものへ言うては居れど、かりもの理が分からん。」(23.6.17)とも言われ、「分からんにや尋ね来るがよい。」(24.11.1)、「分りなくば分かる処まで尋ね。」(23.6.17)と叱咤もされます。

親神から“一条に”来た話を、人間が“一条の”心で学び、心にすっきりと治めることが求められてきます。前掲明治22年9月19日の「おさしづ」は、「話一条、話人間拵えた時の話、」に続けて、「一人処どうある。一つ余儀無き事情である。どちらでも案じる事は要らん。案じるといふは、真に受け取る理が分からんから案じる。」と論されます。分からないことはとことん原典に尋ね、案じることなく、親神の話に凭れることができるよう、日々研鑽に励めることを願います。